

西博 関 阪 大万

中核施設の概要発表

「いのち」テーマに8館で構成

2025年日本国際博覧会協会は4月18日、大阪・関西万博(2025年4月13日〜10月13日)の中核施設となる「シングネチャーパビリオン」の概要を東京都内で発表した。日本を代表する8人の研究者、アーティストらをプロデューサーに、「いのちを知る」「いのちを育む」など八つのテーマでそれぞれ趣向を凝

らした展示とイベントを八つの施設で行う。万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を具現化する「いのちの輝きプロジェクト」として、8人のプロデューサーがそれぞれの思いを込めた展示とイベントをリアルとバーチャルで展開する。

放送作家、脚本家の小山薫堂氏は「いのちをつむぐ」をテーマに、食にスポットを当てたパビリオンをプロデュースする。かやぶきをイメージした外観の施設に、食を考える空間や、「未来の食材市場」など八つのゾーンを展開。「興味のあるゾーンを、買い物を楽しむように巡ってもらう」と小山氏という。「食のオリンピック」のような料理人のイベント

も企画している。プロデューサーはほか、福岡伸一(生物学者、青山学院大学教授)、河森正治(アニメーション監督、メカニックデザイン)、河瀬直美(映画監督)、石黒浩(大阪大学教授、ATR石黒浩特別研究所所長)、中島さち子(音楽家、数学研究者、STEM教育家)、落合陽一(メディアアーティスト)、宮田裕章(慶応義塾大学教授)の各氏。

博覧会協会の十倉雅和会長は「開催まであと3年。先日、ドバイ万博の視察で現場の盛り上がりを目の当たりにした。準備を本格化しなければと、の思いを強くしている」と、若宮健嗣・国際博覧会担当相は「万博がいよいよ本格的に動き出す。広く国民、世界中の皆さまに参画いただきたい」と述べた。



「シングネチャーパビリオン」をプロデュースする8氏(4月18日の発表会)

ことなど効率的な部分が多いこともあり、すっかり定着した▼コロナが収束しても、オンラインに置き換わった場面は、対面に戻らないものも少なくないだろう。観光・運輸業界としては、出張・業務旅行の機会が減れば、交通、宿泊、飲食などの需要縮小につながる。国際的な往来が復活し、国際会議や国際的な展示会が再開しても、現地参加者数が減るかもしれない▼MICEの再開について観光庁は、今後の取り組みの方向性を報告書にまとめた。課題の一つには、国際会議のオンライン化、または、オンラインと対面を併用するハイブリッド化への対応を挙げた。現地参加者数を確保するには、ユニークベニューやエクスカージョンの魅力向上、対面によるネットワーキングの有効性の周知が必要と指摘した▼感染状況の落ち着きで、ビジネスの場面でも対面の機会が戻りつつある。本題の用件以外に貴重な情報が得られたり、予期せぬ人に出会えたり。現場を見て新たな発見があったり、現場の雰囲気にもモチベーションが高まったりする。オンラインに代替されない価値を発信することもビジネス旅行の需要を喚起する上で必要だ。【S・M】